

マレーシア サバ州クリアス森林保護区及びエコツーリズム現地視察

2013年6月に、サバ州の州都コタキナバルから南西約115kmほどの場所にあるクリアス森林保護区(Klias Forest Reserve)とその周辺で実施されているエコツーリズムの現場を視察する機会を得たので、その概要を報告する。

クリアス森林保護区

マングローブ林が広がる河口部の内側の泥炭湿地の中に存在する広さ約3,600ヘクタールの保護区である。この保護区にはラミン(*Gonystylus bancanus*)やフタバガキ科の*Dryobalanops rappa*などの希少な樹木が存在する。また、ボルネオ島で最も原始的な泥炭湿地林であり、泥炭の深さや水位は地域毎で

多様である。そのため、同保護区は国際的な研究拠点として高い関心が寄せられている他、その特徴故に厳格な保護が求められている。

クリアス泥炭湿地林フィールドセンターのMr. Christopher Matunjauセンター長からセンターと保護区の概要説明を受けた。センターは2004年に建設され、現在6名の職員が勤務している。センターの主な業務の一つが研究であり、サバ大学などの研究機関と協力して研究活動を実施している。センター内には研究者などの外部からの訪問客が寝泊まり出来る施設やセミナー等の会合に利用出来る施設がある他、保護区内の自然を観察するための通路が整備されており、特に朝早くには多くの鳥類を観察することが出来る。

森林保護区は、保護区内の資源利用を厳しく規制しているが、その周辺地域でいくつかの課題が確認されている。例えば、泥炭地における水路建設である。水利用のために水路を建設することで、泥炭地の水環境が変化し、地域の生態系に大きな影響を及ぼしている。

泥炭地の農地への転換も貴重な泥炭湿地林が失われる要因となっている。この件に関し、センター長から地域住民との関係について質問をしたところ、泥炭はその性質上、農地として適さないことが多く、現在では地域住民との資源利用を巡る深刻な問題は存在しないとのことであった。とはいえ、土地を所有しておらず、また安定した職がなく、保護区内の土地は元々彼らの祖先の土地であったと主張し、保護区内及びその周辺で農業を行おうとする地域住民は存在するようである。森林保護区の規制が届かない保護区周辺での過度な土地利用による保護区内への影響が懸念されている。

このような状況に対して、クリアス泥炭湿地林フィールドセンターは、地域住民との密接な対話や環境教育活動を通じて、保護区への影響緩和に努めている。特に、保護区の研究上の重要性を考え、地



クリアス森林保護区の位置



自然観察用木道とウツボカズラ



保護区周辺では道路沿いにオイルパームが一面に広がる



地元の食材を使ったエコツアーの夕食

域の住民を研究活動の担い手と考え、共同で研究活動を行っているほか、小学校の課外教育としてキャンプ活動やバードウォッチングなどの機会と場所を提供している。

一方で最も深刻な問題は保護区周辺のオイルパーム林の増大である。マレーシア半島部にある民間企業が保護区周辺の土地を広大なオイルパームとして保有している。この結果、保護区は「孤立」し、テングザルなどの野生生物の移動範囲は狭くなっている。

エコツーリズム

クリアス森林保護区から車で約30分移動した場所にエコツーリズムで有名な場所がある。コタキナバル市内の旅行会社でもツアーを企画しており、マレーシア人だけでなく外国人に人気があるツアーである。その特徴は、クルージングで川周辺に生息するテングザル、バッファロー、キングフィッシャーといった鳥など、多種多様の野生生物を観察することが出来ること、特に圧巻なのが「クリスマスツリー」とも言われる太陽が沈んだ後に観察できるホ

タルの群れである。

今回の現地視察では、個人経営で運営しているユニークなツアーに参加した。このツアーは企画から運営まで全て「地元仕様」であり、地元の人で実施し、地元の資源を有効に活用し、自然環境への影響を極力小さくするように努めていた。ツアー会社の社長はサバ大学で哺乳類関連分野の研究員補佐として勤務していた経歴を持つ。生態系管理に関する豊富な知識を有しており、この豊富な知識を基に、個人経営で自然環境への影響が小さいエコツアーを始めたとのことである。

所感

今回の視察を通じ、保護区とその周辺の環境や社会経済の「つながり」を意識した計画と活動が必要であることを改めて認識した。

サバ州にとってオイルパーム産業は経済成長にとって必要不可欠なものである。厳格に線引きがされている森林保護区の周辺の土地がオイルパームに転用されている地域は、クリアス以外にもサバ州の多くで見ることができる。森林が隔離されてしまうことで野生生物の生息・移動範囲が限定的となっており、生息地間をコリドーでつなぐ活動も始まっている。また、オイルパームへの土地転用によって、住民が土地を失うという社会問題も発生している。

欧米式と言われる「厳格な線引き」で特定地域を保護するだけでなく、その周辺地域の保全と併せて、また地域社会との連携を通じて、包括的な取り組みが進められることを期待したい。その一つの可能性としてエコツーリズムがあると思われる。地元の人材や自然資源を持続的に利用し、得られる利益を地元還元するツアー形態を追究すべきであるが、核となる人材、「ローカルチャンピオン」の育成が有効と思われる。地元の生態系や人間活動を含む地元の社会経済システムに熟知した人材が、環境に優しい持続的なエコツーリズムの実施には不可欠である。外部からの投入を考えるのではなく、地元根付く活動の実施のためには、時間がかかっても「ローカルチャンピオン」の育成に重点を置くことが得策であると考えられる。

(鈴木和信：JICA サバ州を拠点とする生物多様性・生態系保全のための持続可能な開発プロジェクトチーフアドバイザー)